論文の要旨

| | |
|---|---|
| ふ　り　が　な<br>氏　　名 | まつもと　まい<br>松本　　舞 |
| 論　文　題　目 | ヘンリー・ヴォーンと 17 世紀神秘主義思想 |

論文の要旨

本論は、ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621-1695）の『火花散る火打石』(Silex Scintillans, 1650）の表現を 17 世紀神秘主義思想から新たに読み直すことを目標とした。

序章では、『火花散る火打石』の冒頭のエンブレムに錬金術的な意味が見出されていることを提示しながら、ヘンリー・ヴォーンの詩群を神秘主義思想から論じた論文を、エリザベス・ホームズ、E. C. ペティット、ロス・ガーナー、トマス・カルホーン、アラン・ラドラム、スタントン・J・リンデンの論考を中心に確認した。加えてヴォーンが、他の多くの 17 世紀の英国の詩人とは異なり、霊的存在をすべてのものの中に見出すアニミズム的思想を持ち、石をはじめとする被造物すべてに霊が宿ると考えていることに言及しながら、本論では、神秘主義思想の一環として錬金術の思想を取り上げることについて述べ、さらに本論文の構成を示した。

第一章は、「神秘主義思想と錬金術思想」と題し、ジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』の中で描かれた、錬金術と賢者の石の描写を起点にして、17 世紀中葉に至るまでに出版された錬金術のマニュアルを手掛かりに、錬金術の定義や工程を概観した。また、アンドリュー・メンデルソーンの論考を手がかりに、清教徒革命の時代の錬金術の用語や概念の流動性が政治的利用の観点からは極めて高く、とりわけ 1650 年の初頭、チャールズ一世の処刑を挟んで顕著になったこと、また、錬金術に関する議論が流布するためには、擁護者としての国王の役割が大きかったこと、さらに、錬金術が急進派のピューリタリズムを擁護するものであった、という指摘を考察し、錬金術と政治の関係について再確認した。

「十七世紀英文学と錬金術」と題した第二章では、16、17 世紀の詩人たちの錬金術の描写を検証した。まず、第二章第一節では、錬金術の二つの現れ方を確認した。錬金術の否定的な描写として、エリクシルを追い求める錬金術師たちの愚かさや、彼らの詐欺師的側面を浮き彫りにする、トマス・ロッジの「錬金術の解剖」や、ジョン・ダン、アンドリュー・マーヴェルの作品を確認した。更に、ウィリアム・カートライトの「ノープラトニッククラブ」と題された詩の中では、精神的な愛が錬金術に、そして精神的な愛の不毛さが錬金術の失敗に喩えられていること等を検証した。また、錬金術の肯定的用法として、エイブラハム・カウリー の「第五オード―我々が暮らす時代、我々の尊敬すべき国王チャールズの御代」と題された詩の表現が、錬金術師たちが失敗を繰り返すことを非難しながらも、チャールズが「鉄」の時代から「黄金」の時代へ変えることができた統治者として錬金術師に喩えられていることを指摘した。第二章第二節では、錬金術師に対する皮肉を顕著に表すものとして、ベン・ジョンソンの『錬金術師』を再検証した。この戯曲の中では、詐欺師の側面をもつ錬金術師サトルが、自らが作り出すエリクシルには若返りと伝染病の治療の効果があることを謳っていることを考察した。更に、ジョンソンは、錬金術師を利用して勢力を拡大しようと企んでいる、清教徒たちに対する批判を描いていること、王党派のジョンソンに言わせれば、清教徒たちの「熱狂」(‘zeal’）は、賢者の石を虚しくも追い求めている錬金術師たちの情熱と何ら変わりないものであること、都合に合わせて言葉を捻じ曲げている清教徒たちの聖書解釈は、言葉の真意をあいまいにし、奥義を隠そうとする錬金術師たちと同様の行為でもあることが示唆されていることを明らかにした。

さらに第三章では、聖書と錬金術の相関関係、神の力と錬金術についての再検証を試みた。第三章第一節の中では、聖書のエピソードを錬金術的に解釈する試みが行われていたことに注目し、アダムの堕落と原罪、キリス

トによる人類の救済という聖書の主題が、錬金術思想の文脈においては、人類の堕落によって生じた毒とその浄化として示されたという見解を示した。続く第三章第二節では、ヴォーンの詩行の中に、堕落に伴う音と罪との関係、騒音と調和のとれた音との対比、そして、感覚器官と幼年時代との関係を見出し、その政治的意味合いを探りながら神秘主義思想からの解釈を試みた。本節では、ベーメの論文を併せて検証しながら、天と地が呼応し、天と地の間で音楽が共鳴していること、加えて、罪なき幼年時代への回帰願望は、エデンの園への回帰願望と重なり、感覚器官から「齢」の教える「悪」を取り除くことで、舌や耳を浄化し、声を堕落から救済しようとする処方でもあることを明らかにした。第三章第三節では、New Light に対するヴォーンの批判が錬金術の表現を伴うこと、17 世紀中葉の政治的文脈の中で、神秘主義思想、特に錬金術の中でも、過度な、誤った熱は、しばしば注意して排除すべきものとして説明されていることを論じた。第三章第四節では、終末論の論調が高まっていたことを示す神秘主義思想家たちの理論を再確認し、ヨハネが黙示録の中で描いた新エルサレムの基壁をなす宝石を錬金術の文脈で再考察した。特に、堕落からの救済を、錬金術的工程として読み替える本論での試みは、終末論と錬金術を結びつける新たなものである。

「ヴォーンと錬金術医学」と題した第四章では、ヘルメス医学の理論に準じたヴォーンの表現を明らかにした。第四章第一節では、ヴォーンにとっての十字架は、苦難であると同時に、「健康をもたらす」「丸薬」であり、毒を薬へと変化させるパラケルスス医学がヴォーンの霊的医学の根底となるという見解を示した。さらに、第四章第二節ではマグラダのマリヤの「技」がこの世的な技としての「自然魔術」即ち実践的錬金術から霊的錬金術へと変化していることをヴォーンが表現したこと、マリヤが涙という真の錬金術による秘薬を得る一方で、パリサイ人に暗示された清教徒の偽りの聖人性への批判が、「らい病」という疾患の描写を伴って試みられていることを検証した。また、ロバート・バートンや、アンドレ・ローレンティウスなどのメランコリーに関する論文を詳細に分析し、‘rheum’ という特定の粘液と「粘膜分泌物」(‘phlegm’)との関係を示した。このような医学理論からの新たな考察を行うことで、ヴォーンが、医学物質という絶対的な証拠により、マリヤの聖人性を示し、清教徒の偽善的聖人性の批判を試みたという新しい論を展開した。

第五章は、「神秘主義思想の自然とヴォーン」と題し、自然を物理的に破壊し、霊的に汚染する清教徒に対する批判を、神秘主義思想に準じた自然観から捉え直すことで、ヴォーンの被造物の描写を再検討した。第五章第一節では、神秘主義思想の理論に影響を受けたとされている、「夜」と題された詩を再考察した。この詩の中の表現において、ヴォーンが、植物のどの部分も同じように「神性」が宿っていることを暗示していること、この水平的な捉え方は、ミルトンやベーメよりも更に、神秘主義的であることを論じた。また、第五章第二節では、神が被造物たちに与えた力を含め、ヴォーンの自然観は、ヘルメス哲学や新プラトン主義が論じた自然と神との関係に由来するものにとどまらず、自然の中に存在する神を見出そうともしない保守派清教徒たちに対する攻撃を内包することを示した。加えて、ヴォーンは、神秘主義者たちの唱える sympathy のもつ魔術的要素を更に深化させた形で捉えていること、更に、神から与えられる霊的な力は錬金術の用語である「第五元素」や「磁気」として表現されていること、このような力によって、被造物は神と霊的交渉をすら持つことが出来ると考えていることを指摘した。そして第五章第三節の中では、石には「植物的魂」すらなく、感覚、即ち「動物的魂」などあるはずがないと考えている人々の考え方を逆手にとって、石たちはすべての罪を暴き出す力を持っていると詩人が考えていることを明らかにした。石がもつ、罪の看取能力はヴォーンの詩の中で「木」の持つ能力としても描かれており、第五章第四節の中では、ヘンリー・モアの表現とヴォーンの表現を比較しながら、ヴォーンが木に与えた看取能力が、憤りの念を感じ、批判し、糾弾する能力をさえ持つ力であるという見解を示した。神秘主義思想における生きた自然の概念は、ヴォーンによって、より宗教的・政治的なレベルで、罪を暴き出す力へと変化させられたという新たな見解は、神秘主義思想に影響を受けたヴォーンの自然描写を政治的に捉え直すものである。

終章では、ヴォーンが描く最後の審判の根底には、石たちもまた救済されるべきであるという詩人の信念があったこと、また、神学的な最後の審判もまた一種の錬金術として読み替えられることを再確認し、本論の第二章、三章、第四章で行った、清教徒の「熱狂」に関する考察を再度、錬金術の視点から総括した。錬金術の論点は、ヴォーンに、急進派の清教徒たちを偽の錬金術として描き出させるだけではなく、清教徒の「熱狂」を攻撃させ、医学物質をもってして清教徒たちの盲目性を浮き彫りにさせる力を持つものであったという論を提示した。そして、ヴォーン兄弟が、自身らの心を「火打石」に同化し、その火花を散らせようと試みるのは、比喩的に「固く頑ななこの世の火打石」である人間が、最後の審判の際に被造物である石と一体となって神の錬金術による変容を受けるためであり、神に拠る真の錬金術によって取り出されるものは、堕落前への世界と帰ってゆくためのエリクシルであったことを示し、本論の結論とした。